

野間宏全集

第十四卷

野間宏全集

第十四卷

筑摩書房

野間宏全集 第十四卷

一九七〇年三月十日第一刷発行

著 者 野間宏

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一(代表)
郵便番号一〇一―九一
振替東京四一二三

本文印刷 暁印刷株式会社
製本 山晃製本株式会社

目次

I

解放の文学

小説論（I）

小説論（I）

小説論（II）

実験小説論

世界文学の課題

世界文学に通ずる道

個人主義的人間像と社会主義的人間像

独創

人間の要素の分析と総合

行動の文学（I）

行動の文学（II）

行動文学の方向

現代文学一問一答

Ⅱ

ヴァレリーの『シャルム』について

詩に於けるドラマツルギー

たたかいの詩

詩と革命

虎の斑

構成のある詩

竹内勝太郎の『明日』

安東次男の詩について

高安国世の『真実』

凝血にふるえる葉先

前進感覚

詩精神の確立

詩人は動きはじめた

詩壇時評

一九五二年版『荒地詩集』

フランス解放詩について

『詩とは何か』

『現代詩辞典』

Ⅲ

ジイドへの手紙

ジイドのラフカディオ

ジイドの問題

ジイド論（Ⅰ）

ジイド論（Ⅱ）

ジイド論（Ⅲ）

ジイド化

『マダム・ボヴァリー』論

フローベールの文体

モオパッサン

魂と肉体と社会との結合

私の主題の一つ

物質と芸術

サルトル否定

状況について

『ペスト』と『デカメロン』

『ペスト』について

アラゴンへの期待

空間的な展開

コールドウエル著『汚れた土地』

アラゴン著『血ぬられしフランス』

キウルチス著『夜の森』

クロード・モルガン『人間のしるし』

クロード・モルガン『世界の重み』

Ⅳ

自分の作品について（Ⅰ）

自分の作品について（Ⅱ）

戦争小説について

どう人間をとらえるか

戦後文学についての反省

私の創作体験

『真空地帯』を完成して

私の小説観

実験小説からの脱出

無 題

小さい報告

狭い場所

切り開くということ

言葉の水脈

伝統からの脱出

文体・顔その他

公開質問

科学と文学

革命期の文学

「プロレタリア文学」覚書

人間内容の変革から

小ムイシュキン・小スタヴローギン

青春の書『地の糧』

読書とものをみる力

私の読書遍歴

ノート

V

島崎藤村の『破戒』

『破戒』における人間自然	335
島崎藤村の『春』	337
田山花袋のこと	339
田山花袋の『小説の作法』	342
椎名麟三論（Ⅰ）	345
椎名麟三論（Ⅱ）	347
椎名麟三論（Ⅲ）	349
花田 清輝	350
堀田善衛論	352
大阪出身の作家	354
三島由紀夫の耽美	358
新しい疑問	362
森田草平さんの思い出	366
田中英光について	367
宮本百合子のこと	368

書 評

VI

新しい文学の出版

文化時評

スタイルについて

新人論

一九四七年の小説

文芸時評(Ⅰ)

文芸時評(Ⅱ)

文芸時評(Ⅲ)

自主独往の文学

明確な人間像の確立

歪められた日本の小説

雑誌小説と労働者の小説

近代文学確立への模索

428 425 423 421 419 417 415 414 411 409 406 401 399 370

人間性の奪還へ

戦争と文学

日本近代文学への評価

〈対談〉文学創造の秘密

解説

〈対談者〉森川達也・渡辺広士

小林祥一郎

485 441 438 434 431

文学の探求

I

解放の文学

現在日本は解放に面していると言われています。即ち、連合軍は、敗戦日本の人民を、戦争指導者の手から解放し、日本の過去の封建的な、軍国主義的な制度から解放し、各人が互いに各人の内部にある人間を尊重して生きて行く民主主義の新たな社会をこの日本に現出せしめようとしているのであります。しかしながら考えて見ますれば、この解放は、私共にとりましては、むしろ外部から、外から、連合軍によって与えられたものであるであります。外部からの解放であります。しかし、解放を眞の解放たらしめるためには、この解放を単に外部から与えられたものとして受け入れるだけではなく、これを私共の内からの解放として、私共自身の手で自主的に解放を遂行しなければなりません。私共各人が内部から目覚めて、眞に自覚することによって、この解放に正しい内容を与えて行くのでなければ、ほんとうの解放なるものもたされないと云わなければならぬのであります。そして、この解放を内部からの自主的な解放たらしめる役割を担うものとして、私は文

学というものを考えるのであります。むしろ文学を媒介とせずしては、かかる内からの解放はなされるものではないとさえ言いたいと思います。と言いますのは、文学は、あらゆる問題、それが自然的問題であらうと社会的問題であらうと、すべての問題を各人の自覚、各個人の肉体を通しての自覚に於いて解決せんとするものであるからであります。文学はあらゆる問題を各個人の自覚過程に於いて、あるいはさらに言いかえるならば、各個人の体験の深化過程に於いて追究し解決せんとするものであるのであります。しかもそれは人間のこの肉体を通してなされるのであります。諸君とか私とか言うこの具体的な人間のこの肉体を通して、各人の具体的な体験をつくり上げ、それを押し拵げ深め、この体験に正しい方向と正しい判断とを与えるという役目を文学はもつのであります。

私共はこの眞の解放をもたすための文学を、いま考えて行こうと思っておりますが、では、その眞の解放をもたせる文学はいかなるものであるか、また、かかる文学はいかなる文学でなければならぬかということを考えるに当って、では一体日本の過去には、そのような眞に人間を解放する文学はなかったのかどうかということが疑問にわたると思います。果して日本にはかかる文学がなかったものでありましょうか。残念ながら私はなかったと言わ